

藤島：バレーボールの「サイドアウト制とラリーポイント制」の比較について—大学女子の試合より—

バレーボールの「サイドアウト制とラリーポイント制」の比較について

— 大学女子の試合より —

藤 島 み ち

I. はじめに

平成10年10月28日、国際バレーボール連盟（FIVB）は東京都内で総会を開き、現行のサイドアウト制（サーブ権が有る時のみ得点）を廃止して、すべてのセットをラリーポイント制で行うことを決定した。つまり、従来の日本の9人制のように、サーブ権の有無に関わらずプレーが終了したら得点されるシステムに改正したのである。

改正の狙いは次の3点である。「①試合時間の短縮によりテレビ放映がしやすくなる。②プレーが終了するごとにポイントされるので試合にスピード感がでる。③得点方式が簡素化され観客がわかりやすくなる。」これらにより、現代人の要求しているスピード感を備えたバレーボールとなり、人々の関心を集めることになるかと判断したのである。しかし、平成11年度に入り、実際に公式戦でラリーポイント制を採用して試合が実施されているが、国際バレーボール連盟の思惑通りに人々の関心が高まったかどうかは疑問である。少なくともバレーボーラーからは不評である。不評の理由は皮肉なことだが、改正の狙いへの批判がほとんどである。すなわち「①なぜプレイヤーの思いよりテレビ放映を優先するのか。②すべてのプレーがポイントに関係するので、スピード感はでたが、ダイナミックなプレーが少なくなってしまった。③簡素化されたが、バレーボールの醍醐味の一つである逆転する場面が少なくなった。」等である。

物事を良くしようとして後退してしまうことは間々あることである。このラリーポイント制の導入もこれから数年経てば、改正して良かったと感じる時が来るかもしれないが、現時点では少々難しいように思われる。しかし、今後しばらくは、このラリーポイント制で試合が実施される予定である。予定であるというのは現在、バレーボール関係者の間では「シドニーオリンピック（2000年度開催）まで続行」の説と「10年間は続行（FIVBの姿勢）」という説があるからである。はっきりしていることは「永遠にではないがここしばらくはこのルールのみである。」ということである。

そして今、大切なことは、今回のルール改正の批判をするより、ラリーポイント制の戦い方を考察することである。そこで平成10年度の全日本バレーボール大学女子選手権大会の決勝と準決勝（サイドアウト制）および平成11年度の西日本バレーボール大学女子選手権大会の決勝（ラリーポイント制）の各試合結果と得点内容を比較し、ラリーポイント制をどのように戦えば有利になるか検討してみることにした。

Ⅱ. 平成10年度全日本バレーボール大学女子選手権大会と西日本大学女子選手権大会

1. 平成10年度全日本バレーボール大学女子選手権大会「決勝・準決勝（サイドアウト制で実施）」を検証

各試合、ビデオ撮影した映像より試合結果と試合時間およびプレーを終了させた内容を検証し、集計して表にまとめた。尚、この大会はサイドアウト制で実施されサーブ権がある時のみポイントし、「15点」先取したチームがセットを得、5セットのうち先に3セット取得したチームが勝者となる。

(1) サイドアウト制とラリーポイント制の比較

1) 決勝「T大学 対 NW大学」

決勝はT大学とNW大学が対戦し、セットカウント「3対1」でT大学が優勝した。この試合で実施された1セット「15点」のサイドアウト制の得点と時間をセット毎に、「表1-1」にまとめた。「表1-2」は、サイドアウト制で実施された試合内容を、現行のラリーポイント制に置換してまとめた。(但し、1セットを全て置換すると25点以上になるのでどちらかのチームが「25点」になった時点で試合終了として置換した。) また、試合時間はビデオテープのカウントを参考にした。

表1-1 サイドアウト制の得点と時間（総試合時間：100分）

	1セット	2セット	3セット	4セット
T大学	* 15点	4点	* 15点	* 15点
NW大学	13点	* 15点	7点	2点
試合時間	30分	20分	29分	21分

(「*」は取得セット)

表1-2 ラリーポイント制に置換した得点と時間（総試合時間：64分）

	1セット	2セット	3セット	4セット
T大学	* 25点	15点	* 25点	* 25点
NW大学	20点	* 25点	20点	17点
試合時間	16分	16分	17分	15分

(「*」は取得セット)

藤島：バレーボールの「サイドアウト制とラリーポイント制」の比較について—大学女子の試合より—

サイドアウト制の試合をラリーポイント制に置換してみると、総試合時間が「100分」から「64分」に「36分間」短縮されて試合が終了することになる。つまり、ラリーポイント制で試合を実施すると、今回のルール改正の狙いである試合時間の短縮が可能となり、全セットを通じて試合時間が短縮されるのでスピード感がでる。また、試合結果はいずれの場合も、T大学がセットカウント「3対1」で同じ結果であった。

4セット目「表1-1」より「15対2」の得点で判断すると圧倒的なT大学の勝利であるが、「表1-2」では「25対17」なので得点からT大学の圧倒的な勝利とは言えない。このことは、2セット目に関しても同じようなことが言える。これらのことは、ラリーポイント制ではサーブ権が無くても、サイドアウトで得点が加算されることが要因であると考えられる。要するに、サイドアウト制では無得点であったサーブレシーブ（対戦相手のサーブをレシーブすること）からの決定が、ラリーポイント制では得点になるので、サーブレシーブからの決定率（攻撃・ブロック）が高ければ、得点差が余り開かない試合になることが伺われる。

2) 準決勝「NW大学 対 K短期大学」

セットカウント「3対1」でNW大学が勝ち、決勝と同様に「表2-1、表2-2」のようにまとめた。

表2-1 サイドアウト制（総試合時間：101分）

	1セット	2セット	3セット
NW大学	* 15点	* 17点	* 15点
K短期大学	11点	15点	3点
試合時間	43分	37分	21分

（「*」は取得セット・2セット目はジュースなので2点差開くまで）

表2-2 ラリーポイント制に置換（総試合時間：66分）

	1セット	2セット	3セット
NW大学	* 32点	28点	* 25点
K短期大学	30点	* 30点	16点
試合時間	25分	23分	18分

（「*」は取得セット・1、2セット目はジュースなので2点差開くまで）

この試合も決勝と同じくラリーポイント制に置換すると、総試合時間が「101分」から「66分」に「35分間」短縮される。特に接戦を繰り広げた1、2セットの試合時間を比較すると、サイドアウト制の「80分（43分+37分）」に対して、ラリーポイント制では「48分（25分+23

分)」で決着がつき「32分間」の短縮となる。注目は、サイドアウト制をラリーポイント制に置換すると、「表2-1」と「表2-2」とでは異なる試合結果になったことである。サイドアウト制では、1、2セット共にNW大学の勝利であるが、ラリーポイント制に置換すると、2セット目は「30対28」でK短期大学の勝利となる。仮にこの試合がラリーポイント制で実施されていたら、セットカウント「2対1」なので4セット目以降の勝敗は予想できない。

試合内容が追いつ追われつの接戦の場合は、同じ試合でもサイドアウト制とラリーポイント制の得点方法で比較すると、異なる勝敗の結果が生じることを実証した結果となった。

(2) 得点内容

1) 決勝「T大学 対 NW大学」

試合内容の得点内容を「①攻撃②ブロック③サーブ④その他の得点⑤相手チームの失点」の項目別に集計した結果は、「表3-1-(1)・表3-2-(1)・表4-1-(1)・表4-2-(1)・表4-2-(2) (各々(2)は攻撃の内訳：攻撃は得点率が最も高い)」にまとめられる。尚、「④その他の得点」はセッターのパスフェイントとダイレクトスパイクの決定で、「⑤相手チームの失点」は相手チームのスパイク、レシーブ等のミスプレーである。

表3-1-(1) サイドアウト制の得点内容 [() 内の数字はラリーポイント制に置換した得点]

	1 セット		2 セット		3 セット		4 セット	
大学名	T大学	NW大学	T大学	NW大学	T大学	NW大学	T大学	NW大学
①攻撃	8 (26)	8 (28)	2 (16)	8 (21)	7 (26)	3 (22)	8 (20)	3 (14)
②ブロック	1 (3)	3 (4)	1 (1)	3 (4)	3 (3)	3 (4)	4 (5)	0 (0)
③サーブ	0 (0)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
④その他の得点	1 (1)	0 (2)	0 (0)	1 (1)	1 (1)	0 (2)	3 (3)	0 (2)
⑤相手チームの失点	6 (12)	1 (5)	1 (3)	2 (4)	4 (12)	1 (6)	0 (5)	2 (6)
⑥①～⑤の合計	15 (42)	13 (40)	4 (20)	15 (31)	15 (42)	7 (34)	15 (33)	5 (22)

表3-1-(2) ①攻撃の内訳得点 [() 内の数字はラリーポイント制に置換した得点]

	1 セット		2 セット		3 セット		4 セット	
大学名	T大学	NW大学	T大学	NW大学	T大学	NW大学	T大学	NW大学
①攻撃	8 (26)	8 (28)	2 (16)	8 (21)	7 (26)	3 (22)	8 (20)	3 (14)
レフトスパイク	1 (6)	2 (6)	0 (5)	3 (7)	2 (6)	1 (7)	5 (7)	0 (3)
センタースパイク	4 (11)	1 (2)	1 (7)	1 (5)	1 (8)	1 (6)	1 (6)	1 (2)
ライトスパイク	1 (1)	2 (9)	1 (4)	2 (3)	2 (8)	1 (5)	1 (3)	2 (6)
軽打・フェイント	1 (4)	1 (3)	0 (0)	2 (5)	0 (0)	0 (1)	1 (3)	0 (0)
ブロード(ライト移動)	1 (3)	2 (6)	0 (0)	0 (2)	1 (2)	0 (2)	0 (0)	0 (1)
時間差	0 (1)	0 (2)	0 (0)	0 (0)	1 (2)	0 (1)	0 (1)	0 (2)

*ブロード(ライト移動):スパイカーがセンターポジションからライトポジションまで移動して攻撃するプレー

藤島：バレーボールの「サイドアウト制とラリーポイント制」の比較について—大学女子の試合より—

「表3-1-(1)」より「①攻撃」に関して、1セットは両大学同じ「8点」で、ブロックとサーブの得点ではNW大学の方が「3点」(T大学：ブロック「1点」、サーブ「0点」・NW大学：ブロック「3点」。サーブ「1点」)勝っている。しかし、「⑤」からNW大学はミスが多く、この数値が1、3セットの勝敗に大きく関わっているようである。特に、ラリーポイント制に置換した場合、1セットの「12点」の失点は勝敗に大きな影響を与える。

2セットはNW大学が攻撃「8点」とブロック「3点」で、T大学の攻撃「2点」とブロック「1点」と比べて「8点」の差をつけ、危なげない試合運びであった。また、ラリーポイント制に置換した得点から「①攻撃」が「21点」あり、この数値よりサーブ権がある時の攻撃の決定本数がT大学よりも高いと言える。同時に、「表3-1-(2)」よりレフトを主体にセンターとライト攻撃を絡めた攻撃につなげていた。

4セットのT大学のブロック「4点」からは、ブロックは試合展開を有利にするために大切な要素であることが立証でき、このブロック力がNW大学の攻撃を「3点」に押さえ勝利を導いたと言える。

また、T大学の1、3セットの「表3-1-(2) ①攻撃の内訳」で注目すべきは、レフトスパイクに偏らないで、センターとライトのスパイクの決定本数が多いことである。一般的に、レフトポジションはエースと呼ばれ、決定率の高いスパイカーが位置し、ラリー中にトスがある本数が多いので決定本数が多くなる。センターやライトポジションのスパイカーは、サーブレシーブからの攻撃やチャンスボールのレシーブから絡むことが多いので、レフトスパイカーと比較して決定本数や得点が少なくなる傾向にある。ところがT大学はサイドアウト制では大きな数値ではないが、ラリーポイント制に置換した得点を見ると「レフト・センター・ライト」に数値が散らばり、しかもかなりの攻撃得点となっている。このことはラリーポイント制では、サーブレシーブからの決定も得点になるので、攻撃得点を増やすために安定したサーブレシーブ力を身につけ、そこから多彩な攻撃のできるチームをめざすことが試合を有利に展開できることを示している。

次に、ラリーポイント制で試合をした場合を想定して、勝者チームが「25点」取得した時点の得点「表3-2-(1)」と攻撃の内訳「表3-2-(2)」をまとめた。

表3-2-(1) ラリーポイント制の得点に置換

	1 セット		2 セット		3 セット		4 セット	
大学名	T大学	NW大学	T大学	NW大学	T大学	NW大学	T大学	NW大学
①攻撃	14	13	12	18	13	14	16	10
②ブロック	3	2	1	4	2	2	3	0
③サーブ	0	0	0	0	0	0	0	0
④その他の得点	1	1	0	1	1	0	3	1
⑤相手チームの失点	7	4	2	2	9	4	3	6
⑥①～⑤の合計	25	20	15	25	25	20	25	17

表3-2-(2) ①攻撃の内訳得点

	1 セット		2 セット		3 セット		4 セット	
大学名	T大学	NW大学	T大学	NW大学	T大学	NW大学	T大学	NW大学
①攻撃数	14	13	12	18	13	14	16	10
レフトスパイク	4	2	4	4	2	3	6	2
センタースパイク	8	1	5	5	3	4	4	0
ライトスパイク	0	4	3	3	5	3	2	6
軽打・フェイント	1	2	0	5	0	1	3	0
ブロード(ライト移動)	1	3	0	1	2	2	0	1
時間差	0	1	0	0	1	1	1	1

「表3-2-(1)」の1、3セットは「①～④」ほとんど大きな違いは見られないが、「⑤相手チームの失点」に違いがみられ、これが勝敗を左右したと考えられる。特に、3セットはT大学の「25点」のうち「9点」が相手チームの失点で、得点の約4割を占めることになる。このように、ラリーポイント制の場合は、一つ一つのプレーが得点となるので、ミスをして失点につながらないように常に集中力を持続させなければならない。サイドアウト制の場合は、サーブ権がある時のミスは得点には関係なかったので、サーブ権を持っている時は思い切ったプレーができた。このことがラリーポイント制の場合、ダイナミックなプレーの場면을減少させるのではないだろうか。

「表3-2-(2)」の2セットでは、T大学、NW大学の「レフト・センター・ライトスパイク」の決定本数はほとんど同じであるが、「軽打・フェイント」の数値で「5本」(ラリーポイント制)の差がある。この数値よりNW大学は、スパイクだけでなく軽打やフェイントを織り交ぜて攻撃に変化を加えていることが伺われる。こうしてラリーポイント制では、決定した全てのプレーがポイントになるので、試合の状況に応じて軽打やフェイントを織り交ぜることも必要であると思われる。但し、このプレーは試合を有利にすすめている時に効果的だと考えられる。

藤島：バレーボールの「サイドアウト制とラリーポイント制」の比較について—大学女子の試合より—

つまり、T大学とNW大学の試合を「25点」のラリーポイント制に置換してみると、NW大学の2セットの勝因は、多彩なコンビネーションだけでなく軽打やフェイントを含めた多彩な攻撃だと考えられる。反対に、4セットの敗因はセンタースパイクの「0点」から単調な攻撃を相手に読まれたことがあげられる。そして、ミスしたプレーは失点で相手の得点になるので、サイドアウト制よりも緊張感と集中力が大切な要素となりそうである。このことは観客にとって得点の変化が常に有り、同時にプレーヤーの緊張感がつたわり興味を持って試合を観戦することができ、ルール改正の狙いに当たっているように考えられる。

2) 準決勝「NW大学 対 K短期大学」

サイドアウト制で実施されたこの試合の1、2セットは、ラリーポイントに置換すると、異なる試合結果となった興味ある試合内容である。また、接戦の場合は「表4-1-(1)」の④⑤などの違いが試合の流れに大きく影響しているように考えられる。

表4-1-(1) サイドアウト制の得点内容

	1 セット		2 セット		3 セット	
大学名	NW大学	K短大	NW大学	K短大	NW大学	K短大
①攻撃	9	4	7	6	7	2
②ブロック	2	1	2	2	2	0
③サーブ	1	1	3	1	0	0
④その他の得点	4	1	1	2	1	0
⑤相手チームの失点	2	4	4	4	5	1
⑥①～⑤の合計	15	11	17	15	15	3

表4-1-(2) ①攻撃の内訳得点

	1 セット		2 セット		3 セット	
大学名	NW大学	K短大	NW大学	K短大	NW大学	K短大
①攻撃数	9	4	7	6	7	2
レフトスパイク	2	2	1	2	2	1
センタースパイク	1	1	1	0	0	1
ライトスパイク	4	1	4	3	3	0
軽打・フェイント	0	0	0	1	2	0
ブロード(ライト移動)	1	0	1	0	0	0
時間差	1	0	0	0	0	0

1セットは攻撃の得点で、NW大学の方がスパイク決定本数が「5本」多いことがあげられる。そして、「表4-1-(2)」より攻撃の内訳で、NW大学はライトスパイクの得点が「4

点」でK短期大学の「1点」より「3点」多い、さらにこの「4点」はレフトスパイクの得点より「2点」多く、さらに2、3セットでも同様のことが言える。一般的に、レフトスパイクよりもライトスパイクの決定率が高ければ、試合をすすめる上で有利であることは以前から注目されている。NW大学のK短期大学に対する攻撃内容と試合結果は、このことを実証していると言える。

表4-2-(1) ラリーポイント制の得点に置換

	1 セット		2 セット		3 セット	
大学名	NW大学	K短大	NW大学	K短大	NW大学	K短大
①攻撃	23	20	16	19	11	10
②ブロック	0	1	1	2	7	0
③サーブ	1	0	2	2	0	0
④その他の得点	2	2	1	2	1	2
⑤相手チームの失点	6	7	8	5	6	4
⑥ ①～⑤の合計	32	30	28	30	25	16

表4-2-(2) ①攻撃の内訳得点

	1 セット		2 セット		3 セット	
大学名	NW大学	K短大	NW大学	K短大	NW大学	K短大
①攻撃数	23	20	16	19	11	10
レフトスパイク	4	8	3	5	3	2
センタースパイク	2	5	3	1	0	2
ライトスパイク	10	6	5	9	3	5
軽打・フェイント	4	1	0	3	2	0
ブロード(ライト移動)	2	0	3	1	2	1
時間差	1	0	2	0	1	0

サイドアウト制の試合を25点のラリーポイント制の試合に置換してみると、1、2セットは「25点」では決着がつかないでジュース（「24対24」になった場合、「26対24のように」2点勝ち越したチームが勝者となる）が続き、共に「32対30」と「28対30」で終了したことになる。しかも2セットの勝者は、サイドアウト制とは異なるK短期大学となった。また1セットはサイドアウト制では「15対11」だが、ラリーポイント制ではジュースが続き、「32対30」の接戦をくりひろげたことになる。これらのことは、サイドアウト制の試合をそのままラリーポイント制に置換しただけなので、一概には言いきれないが、試合を中断したプレーが全て得点となるラリーポイント制では、サイドアウト制と比較して、得点の上では接近した試合が多くなるのではないだろうか。なぜならば3セットのように「15対3」の試合もラリーポイント制に置

藤島：バレーボールの「サイドアウト制とラリーポイント制」の比較について—大学女子の試合より—

換すると、「25対16」となるからである。

つまり、ラリーポイント制ではサイドアウト制のように、得点で一方的になることが少なくなるのではないだろうか。要するに、レベルの少し高いチームと対戦する場合、サイドアウト制ではサーブレシーブからの攻撃を決めても得点にはならなかったが、サイドアウト制では得点になるからである。しかし、明らかにレベルの差がある時は別である。

また、同等のチーム同志が対戦する場合、ラリーポイント制ではいかにサーブレシーブからの得点を得てミスを少なくするかにチームに勝機があると考えられる。

2. 平成11年度西日本バレーボール大学女子選手権大会「決勝（ラリーポイント制で実施）」を検証

全日本大学女子選手権大会と同様にビデオ撮影した映像より、次の「(1)・(2)」に分けて試合内容を分析した。

(1) ラリーポイント制とサイドアウト制の比較

F E大学とH大学が対戦しセットカウント「3対1」でF E大学が勝った。(この試合はラリーポイント制で25点先取、5セットマッチの新ルールで実施された。)

そこで、ラリーポイント制(25点)の結果と試合内容をサイドアウト制に置換した数字を「表5」にまとめた。

表5 ラリーポイント制(総試合時間：66分)

	1セット	2セット	3セット	4セット
F E大学	*25(10)点	22(4)点	*25(7)点	*25(12)点
H大学	20(6)点	*25(5)点	23(6)点	14(1)点
試合時間	15分	18分	18分	15分

(「*」は取得セット・()内はサイドアウト制に置換した数値)

総試合時間は「66分」で、従来のサイドアウト制と比較して、4セットの試合にしては短い時間となり、ルール改正の狙い通りである。しかし、「15点」のサイドアウト制に置換すると、「1セット：10対6、2セット：4対5、3セット：7対6、4セット：12対1」で全セットが試合の途中で終了したことになる。特に2、3セットは前半の「4対5」と中盤の「7対6」の競り合いで試合展開が予測出来ない段階である。サイドアウト制ではサーブ権がある時とない時の攻防が、見物で観客を「ハラハラ、ドキドキ」させる場面である。つまり、実力が接近しているチームが対戦する時のサイドアウト制の試合は、「前半・中盤・後半」にそれぞれ追い

ついたり追い越されたりの攻防が見物である。しかし、ラリーポイント制の場合は、一旦リードするとそのまま終盤まで持ち越すことが多いので、この点がバレーボーラーや観客にとって試合が淡泊で、頼りなく感じると考えられる。そして、サイドアウト制の試合に慣れている観客も、ラリーポイント制の試合で得点が次々と変化し、スピード感と緊張感を感じるが、逆転の場面が少なくなったことは、試合の流れに変化がないので、勝敗への興味が薄れると思われる。

また、この試合からラリーポイント制の場合は、試合時間が大幅に短縮され、試合開始から約15分間から20分間に勝敗が決まりそうである。そこで試合が開始されれば、プレーヤーは常に集中して競技し、無駄のないプレーをめざす姿勢がサイドアウト制よりも重要で、この集中力がラリーポイント制の特徴と言える。このことはプレーヤーにとっては厳しい条件となるが、観客にしてみれば緊迫した試合が最初の場面から数多く見られる。そして、逆転の可能性はサイドアウト制より減るが、1、2点のリードをそれ以上離されないようにお互いに努めることからくる緊迫したプレーは興味を持って観戦できるのではないだろうか。

(2) 得点内容

勝敗の結果の得点内容を実施されたラリーポイント制とサイドアウト制に置換した時の得点

表6-1) ラリーポイント制の得点内容 [() の数字はサイドアウト制に置換した時の得点]

	1 セット	2 セット	3 セット	4 セット
大学名	FE大学 H大学	FE大学 H大学	FE大学 H大学	FE大学 H大学
①攻撃	15(1) 14(4)	19(3) 14(2)	23(5) 20(4)	18(6) 12(1)
②ブロック	4(4) 1(0)	1(1) 2(2)	1(1) 1(1)	1(1) 1(1)
③サーブ	2(2) 0(0)	0(0) 2(1)	1(1) 0(0)	3(3) 0(0)
④その他の得点	0(0) 0(0)	1(0) 0(0)	0(0) 0(0)	1(1) 0(0)
⑤相手チームの失点	4(3) 5(2)	1(0) 7(0)	0(0) 2(1)	2(1) 1(0)
⑥①～⑤の合計	25(10) 20(6)	22(4) 25(5)	25(7) 23(6)	25(12) 14(1)

表6-2) ①攻撃の内訳得点 [() 内の数字はサイドアウト制に置換した時の得点]

	1 セット	2 セット	3 セット	4 セット
大学名	FE大学 H大学	FE大学 H大学	FE大学 H大学	FE大学 H大学
①攻撃数	15(1) 14(4)	19(3) 14(2)	23(5) 20(4)	18(6) 12(1)
レフトスパイク	2(0) 4(3)	8(2) 6(1)	8(0) 9(0)	10(4) 7(0)
センタースパイク	6(0) 4(0)	6(0) 2(1)	9(4) 0(0)	5(0) 0(0)
ライトスパイク	3(0) 4(1)	3(1) 3(0)	6(1) 6(2)	2(2) 2(1)
軽打・フェイント	2(1) 2(0)	1(0) 3(0)	0(0) 5(2)	0(0) 2(0)
ブロード(ライト移動)	0(0) 0(0)	0(0) 0(0)	0(0) 0(0)	0(0) 0(0)
時間差	2(0) 0(0)	1(0) 0(0)	0(0) 0(0)	1(0) 1(0)

藤島：バレーボールの「サイドアウト制とラリーポイント制」の比較について—大学女子の試合より—
を「表6－(1)」にまとめ、「表6－(2)」に攻撃の内訳得点をまとめた。

「表6－(1)」よりF E大学が、全セット攻撃の得点がH大学を上回っている。2セットのF E大学の敗因は失点「7点」である。しかし、この失点はサイドアウト制に置換すると、「0点」なので自チームにサーブ権がある時の失点である。よって、もしサイドアウト制であれば、セットカウント「3対0」で勝負がついたかもしれない。ここにラリーポイント制の戦い方のポイントが伺えそうである。

「表6－(2)」からはF E大学の「1～3セット」の攻撃は、各ポジションのスパイカーに散らばり、H大学と比較して各スパイカーの決定能力が接近していると言えそうである。全体的にH大学はレフトスパイカーの得点に偏っており、スパイカーの総合力ではF E大学の方が上回っていることが伺える。

4セットのF E大学の勝因は攻撃とサーブである。サーブで相手のレシーブを乱して攻撃を単調にし、その攻撃をチャンスにしてセンター、ライトを絡めた攻撃ができたことである。要するに、サーブで相手の攻撃を乱すことは、サイドアウト制もラリーポイント制も大切な戦術であると言える。

Ⅲ. 結論

「ラリーポイント制」へのルール改正に伴い、従来のサイドアウト制の試合と改正後のラリーポイント制の試合をビデオより内容を検証した結果は、次のようにまとめられる。そして、改正の狙いの3点「①試合時間の短縮②試合にスピード感がでる③得点方式の簡素化」は、今回の試合からはラリーポイント制にすることで全て当たったと言える。

1. 試合時間

- (1) 改正の狙いどおり、ラリーポイント制の方がサイドアウト制より短縮されて試合が終了するので試合にスピード感がでる。
- (2) 特に、サイドアウト制の接戦やジュースの試合は、大幅に時間が短縮される。
- (3) ジュースになった時は、「2点」差がつくまで試合が続行されるので、ラリーポイント制でも時間が長くなる可能性があり、時間の予測はつかない。

2. 試合結果

- (1) サイドアウト制の試合をラリーポイント制に置換すると、異なる結果になることがある。
- (2) ラリーポイント制の試合をサイドアウト制に置換すると、サイドアウト制のルールで決められていた「15点」までに試合が終了する。つまり「15点」先取のサイドアウト制の

試合の前半や中盤でラリーポイント制の「25点」を取得して試合が終了することがある。

- (3) ラリーポイント制ではサーブレシーブからの決定も得点されるので、一方的な点差の試合が減る。例えば、サイドアウト制の「15対3」はラリーポイントに置換すると「25対16」となることがある。

3. 得点内容と攻撃の内訳

- (1) 「レフト・センター・ライト」の攻撃が多様なチームが有利に試合を展開できる。
- (2) 得点率の高いサーブ(スピードサーブ、コーナーやサイドライン等のコースを狙ったサーブ、相手のサーブレシーブの苦手な選手を狙ったサーブ等)は相手の攻撃を乱すのに効果的である。
- (3) 失点(ミスプレー)の数が試合の勝敗に影響する。
- (4) ブロック能力の高いチームは有利である。

4. ラリーポイント制の有利な戦い方

- (1) サブレシーブからの決定が得点になるので、確実なサーブレシーブからレフト、センター、ライトのスパイカーを絡めた攻撃をめざす。
- (2) プレーが終了するごとに得点されるので、正確でミスの少ないプレーをするために集中力が必要である。
- (3) 日頃から集中力のある質の高いトレーニングを実施し、試合時間が短縮されたことに伴い、ラリーポイント制に応じたトレーニングの時間と内容を検討しなければならない。

以上、「3」「4」に関しては、サイドアウト制とラリーポイント制の両方に言える。今回の試合分析では、ラリーポイント制に改正されても戦い方に大きな違いは見られなかった。

IV. 今後の課題

サイドアウト制の時は、サーブ権がある時のみ得点されるので、試合前のトスで勝てばサーブ権をとった方が有利であった。しかし、ラリーポイント制の場合はサーブ権の有無に関係なく得点されるので、サーブ権とコートどちらを選択した方が有利なのかという疑問がでてきた。要するに、ラリーポイント制の場合、サーブ権をとって相手チームにサーブレシーブから攻撃を決められたら「1点」先取される。それなら、トスに勝った時はコートを選んで自チームがサーブレシーブから攻撃する方を選んだ方が有利であるように考えられる。

次回は、試合前のトスで勝った時に、サーブ権とコートとどちらを選んだら有利なのか検討したい。また、ビデオよりすべてのプレーをチェックして表にまとめて検討を進めてみたが、

藤島：バレーボールの「サイドアウト制とラリーポイント制」の比較について—大学女子の試合より—

科学的なデータ分析がなされていないので、次回はより綿密な分析をし、ラリーポイント制の特徴や戦い方の研究をさらにすすめて行きたい。

V. あとがき

バレーボールの特性に「タイム制限がない」ことが上げられる。この特性がテレビ放映をする時のネックとなり、時間を短縮するために考えたのがラリーポイント制へのルール改正である。バレーボールに限らず、世間の人々に物事を普及するにはテレビ放映は手っ取り早い方法である。テレビが取り上げれば、新聞や雑誌などでも記事になる機会が増え、多くの人々が目にするようになる。バレーボールを普及発展させるためには、マスコミュニケーションを無視することはできないが、今回の改正には無理があるように思われる。ラリーポイント制を有利に闘うために前向きにラリーポイント制と向き合っただけで何度もビデオを見たが、どうも試合内容が希薄に思えてならなかった。今までのサイドアウト制に慣れていることがあると思われるが、今一度、バレーボールの普及のためには何がベストなのか検討すべきではないだろうか。また、1999年9月12日の朝日新聞（朝刊）に「サーブ球の際のネットへの触球や選手のタッチネット等に関する新ルールの変更」の記事が掲載されていた。このルールの適用は2000年1月からで、シドニーオリンピックもこの適用を受けるとのことである。現行ではサーブのネットインや選手のタッチネットの場合はラリーが終了（プレーの中断）する。しかし、今回のルール変更ではそれぞれプレーが続行となるので、試合時間の延長を意味する。試合時間の短縮のためにラリーポイント制に変更したことは、いったいどうなるのだろうか。

バレーボールが誕生して100年余りになる。この間さまざまな検討をし、変遷してきたであろう。考案者のモルガン氏は近年のバレーボールの様変わりをどのように受け止めているだろうか。

VI. 参考文献

- 高橋和之、『バレーボールのゲームづくり』、道和書院、1984年
 吉田敏明、勝本真、中西康巳、『バレーボールの技術と指導』、不昧堂出版、1996年
 朽堀申二、『バレーボール』、泰流社、1997年
 『月刊バレーボール』52巻14号、1998年12月号、53巻8号、1999年5月号
 53巻12号、1999年8月号
 『朝日新聞』、1998年10月28日（朝刊）、1999年9月12日朝日新聞（朝刊）